

セクシュアルマイノリティについての教員研修 プログラム開発の試み

——演劇的な手法を活用して——

Attempt for Development of Teacher Education Program for Sexual Minority:
Workshop Plan Using Drama Method

武田富美子・小菅 望美

TAKEDA Fumiko・KOSUGE Nozomi

I はじめに セクシュアルマイノリティと教員 研修

セクシュアルマイノリティとは、LGBTすなわち Lesbian（レズビアン）、Gay（ゲイ）、Bisexual（バイセクシュアル）、Transgender（トランスジェンダー）の人々を含めて、多様な性の在り方を生きている人たちである。少数であるため社会的に生きにくさを抱えることが多い。

レズビアン、ゲイ、バイセクシュアルなどの同性愛が医学的に病気とされた時代は長く、同性愛が疾病分類から完全に消去されたのは1987年と言われ、ようやく1992年に、世界保健機関も「国際疾病分類改定版第10版」において「同性愛はいかなる意味においても治療の対象とはならない」とした¹⁾が、同性愛への無理解はまだ広範に存在すると考えられる。

「ゲイ・バイセクシュアル男性の健康レポート」によると、思春期におけるゲイ・バイセクシュアル男性のライフイベントは表1のようになる²⁾。

この調査は1999年にわが国で初めてゲイ・バイセクシュアル男性を対象に調査されたものである。これによると、「ゲイであることをなんとなく自覚した」のは平均13.1歳。中学生頃である。「自殺を初めて考えた」のは平均16.4歳。「自殺未遂（初回）」が平均17.7歳。思春期の多感な時代に、深い苦悩を体験する姿を見て取れる。

表1を参考にすれば、小学校高学年もしくは中学校一年生までに、セクシュアルマイノリティに関する確かな情報に基づいた学習の機会が得られることは重要と思われる。

表1 思春期におけるゲイ・バイセクシュアル男性のライフイベント

ゲイであることをなんとなく自覚した	13.1歳
「同性愛・ホモセクシュアル」という言葉を知った	13.8歳
異性愛者ではないかもしれないと考えた	15.4歳
自殺を初めて考えた	16.4歳
ゲイであることをはっきりと自覚した	17.0歳
自殺未遂（初回）	17.7歳
ゲイ男性に初めて出会った	20.0歳
男性と初めてセックスした	20.0歳
性的思考を主な理由とした自殺未遂	20.2歳
ゲイの友達が初めて出来た	21.6歳
ゲイの恋人が初めて出来た	22.0歳

同研究では、学校教育における取り扱いも調査している（図1）³⁾。学校において、90%以上が適切な情報を得られない、もしくは不適切な情報提供や対応をされたと答えている。2005年にも同様の調査が行われているが、ほぼ同じ傾向がみられる⁴⁾。

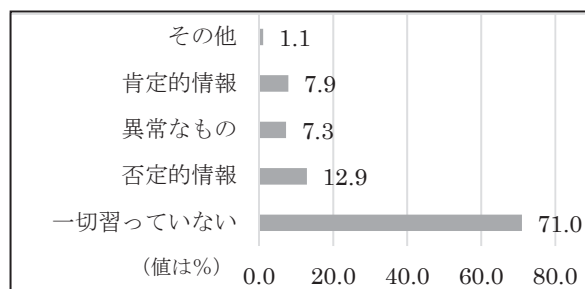


図1 これまでの学校教育で同性愛に関してどのような情報を得たか

教員の対処の仕方によっては、かえって偏見を増長し、いじめの種をつくることになりかねない。しかし、近年、多様な性を生きる人たちや支援団体の社会的な働きかけにより認知が進み、『先生と親のためのLGBTガイド』⁵⁾や中・高生向けの『LGBTなんでも聞いてみよう』⁶⁾なども出版され、情報が得やすくなってきている。

一説には、LGBTを自認する人は7.6%という統計があり、40人クラスであれば当事者が複数いるだろうと想定される⁷⁾。セクシュアルマイノリティについて、まず教員自身が学ぶ必要がある。さらに学校教育で取り上げるとしたら、どのようにすればよいだろうか。

以上のような問題意識から、セクシュアルマイノリティに関する授業を演劇的な手法を用いて立案し、教員研修プログラムとして実施した。この過程を記録することで、セクシュアルマイノリティについての教員研修を検討する一つの材料としたい。

Ⅱ 教員向けセミナーのワークショップ・プログラム開発の過程

獲得型教育研究会⁸⁾主催の教員向け「夏のセミナー」における「授業に活かすドラマ⁹⁾技法」という2時間のワークショップを、同研究会会員で群馬県の小学校教諭（5年目の若手）と高校教諭を経て教員養成に携わる大学教員の著者らが担当することになった。2017年5月初旬のことである。以後、プログラムをつくり実施する過程では、この二人をファシリテーターと記述する。同年8月7日のセミナー当日まで、約1時間の電話が1回、40通近いメール、2度の会合が重ねられた。電話および会合、講習当日の記録については数日のうちに文書化して、ファシリテーター間で確認している。

1 テーマの設定

具体的なプログラムづくりは5月14日の電話での相談から始まった。

「授業に活かす」というタイトルから教科を特定することが話し合わせ、教科化を見据えて道徳が候補に挙がった。ジレンマ教材を取り上げると

いうアイデアが出たが、いろいろテーマを探しているうちに「女友だちの交際相手が女性と知った時、驚き、途惑った」という実体験が語られた。そこから、セクシュアルマイノリティの問題を取り上げる方向に話が進んだ。

それぞれ自分のもつ情報や体験を語るなかで、表1の統計も話題になり、「セクシュアルマイノリティに関して情報を得る機会はある、知識はあっても、実際の場面に遭遇すると途惑う自分がある」ということや、「自分の潜在的な当たり前や思い込みと違うことに会うと抵抗を感じる」など、ファシリテーター自身の途惑いや実感が出された。このテーマを取り上げてよいのか、また可能なのかと逡巡しつつも、一歩踏み出すことになった。

セクシュアルマイノリティに関して的確な情報を得ることは必要だが、授業としてはそれだけでは不十分ではないか。問題を他人事として距離をおくのではなく、自分にひきつけて考えるために、演劇的な手法が有効なのではないか。そのような話し合いを経て、セクシュアルマイノリティをテーマに演劇的な手法を取り入れるという、プログラムの基本方向が明らかになってきた。

①中学校での授業を想定して、50分ぐらいで終わる授業プランをつくる、②その前に関係づくりの短いウォームアップを配し、後に資料提供とディスカッションの時間をもつことで計2時間とする、③演劇的な手法としては、「セクシュアルマイノリティである」と告白されるシーンをロールプレイで体験する、④悩みを持つ個人の問題とするのではなく、社会との繋がりを考えられるワークにする、⑤この授業プランを学校での学習場面で活用するなら、どのように活用できるかを参加者と一緒に考える、などの概要が形づくられた。

2 ロールプレイの状況設定

その後の4日間、メールで、演劇的な手法の中心となるロールプレイの状況設定について検討した。「セクシュアルマイノリティである」と告白するシーンをメインとするのか、間接的に聞いたという場面にするのか。リアルなシーンとして体

験するのか、動物や昔話の登場人物を借りて間接的に表現するのか、などがやり取りされた。状況設定としては、昔話を下敷きにした案が出た。セミナーの参加者の中にも、中学校の授業として取りあげた場合の生徒にも、自分のセクシュアリティに悩みをもつ人がいると想定される。そんな中で、カミングアウトをロールプレイで取り上げることは、参加者全員にとって豊かな学びになるのだろうか。メールでの話し合いが重ねられた。

3 参加者募集に向けての概要の設定

5月28日のメールでは、この問題に取り組む不安が具体的に語られた。

「他のマイノリティに関する問題はこれまでも授業でとりあげてきましたが、その時は、根底に『同じ人間なのに』という揺らぎない前提が自分の中にありました。しかし、この問題は、同じ人間でありながら、『男と女は違う』という私自身に植え込まれた強い意識が存在します。そういった根っこに持っている意識が認識されないと、本当の理解に繋がらない。けれど自分の気持ちを正直に表明することは、他者を傷つけることにならないか。だからこれを取り上げることは、私は怖い」。

しかし、YouTube 配信の LGBT ドラマ「day by day」¹⁰⁾ を双方が視聴するなかで、先の不安に対して他方から、「LGBT の授業は難しいものと考えているからこそ、取り上げていくべきものであると感じました」と返された。

この間、ファシリテーター自身の学習が進み、迷いつつもチャレンジしたいという気持ちを強くしていった。参加者に完成した教材を提供することは難しくても、一緒に試行錯誤することで学びを深めることは可能ではないかと思われた。

演劇の手法を使った『性的少数者についての授業』について、参加者とともに考える姿勢をうちだし、セミナーの参加者募集のためのワークショップの概要を、第一案として表2のようにまとめた。

表2 夏のセミナー 講座概要第一案

【授業に活かすドラマ技法その1～道徳授業で性的少数者について考える～】

一説によると、日本の性的少数者の割合は7.6%といわれています。にもかかわらず、当事者でなければ関わりのないことと思っはいいないでしょうか。一方で、問題を認識しながら授業でどう取り上げたらよいかと悩んでいる教員もいるでしょう。ドラマの手法を使って『性的少数者についての授業』にチャレンジしてみます。私たちも迷いながらの授業提案です。このことでドラマの手法の限界も見えてくるかもしれません。一緒にチャレンジしてください方々の参加をお待ちしています。」¹¹⁾

4 研究会例会での検討とプログラム原案作成

研究会の6月例会（6月17日）で進行状況を報告。その中で、「デリケートな問題なので自分の意見を言いにくい人もいるから、役として発言できるほうがよい。ディベートのように役をふりわけてディスカッションしてはどうか」「今の学生はセクシュアルマイノリティについて知っているので、昔話で状況設定するよりストレートに取り扱ったほうが良い」などのアドバイスがあった。また、例会以外でも「セクシュアルマイノリティに詳しくもない人がファシリテーターをすることで、到らない点や反発をかうこともあるかも知れない」という懸念もだされた。

これらを踏まえ6月29日に最初のプログラム案ができた。状況設定としては、「中学生のAから友人の中学生Bに告白し、告白されたBがCに相談する」とした。セクシュアルマイノリティに関する資料は提供するが、関心の高い人が参加すると想定されることから、2時間という枠の中で情報共有には重点をおかず、友人から同性愛者であるという告白を受けたという設定で、ロールプレイを中心にプログラムを組み立てることとした。

また、ファシリテーターの二人が会って話し合う必要を感じ、日程調整を行った。

5 演劇的手法のシミュレーション

7月1日夜、実際に会って、参加者を想定しながらプログラム案に沿って、ロールプレイの場面を中心にシミュレーションを実施。

そこで最も問題となったのは、Aが同性愛を告白するシーンをどのようにするかということだった。参加者（中学校の道徳を想定する場合は中学生）がどのようにセクシュアルマイノリティについて考えているか分からない段階で、参加者に告白する役を担わせるのは適当と思われない。そこでファシリテーターがAの役をすることになった。

状況設定に関する案

* AさんとBさんは仲良しです。（幼馴染。同じ中学2年生。クラスも塾も一緒）
 ☆ BさんはAさんから「好きな人がいる。とても気になる。いつもその人のことを考えて、その人の姿を探してしまう。でもその人は男の人なんだ。好きだと言えないし、苦しい。親にも相談できない。自分を変なんじゃないかと思ってしまう。生きていくのも嫌になる。このことは誰にも言わないで。特に親には絶対言わないで」といわれました。Aさんの苦しみをなんとかしてあげたいと思うけれど、誰にも言えないのは自分が苦しい。そこで信頼している（C）に話すことにしました。

ファシリテーターのふたりでAとBの役をしながら、Aの告白をどのように伝えるか、会話で表現してみた。Aの告白に対して、Bの反応はいろいろな場合が考えられ、Bとしてセリフを言ってみても「これでよい」という確信が得られなかった。また「どうしたら、そのシーンの雰囲気を出せるのか」「場所はどこか」「学習者にどこを演じて何を考えさせたいのか」「どうしたら、自分事として学習者が捉え考えることができるのか」などの検討事項があがってきた。

さらに、教員のためのプログラムなのでCを教員とする案が出たが、「中学生がこういったことを教員に相談することはあまりないのでは」ということも話し合われた。

6 プログラムの確定

7月21日の研究会例会で、AとBをファシリテーターふたりで演じる場面を他の会員に見てもらったところ、「ふたりの個性に引きずられ、ふたりの価値観が反映されてしまうのではないか」というアドバイスがあった。そのことによってAやBの性格がある程度固定されてしまう。

その後も「『Aさんの苦しみをなんとかしてあげたい』というところが上から目線であり、すでにファシリテーター側の価値観(思い込み)が入っているのでは」「参加者に告白される役になってもらうためには、参加者に直接語りかけるほうが良いのでは」などの試行錯誤の末、「参加者に眼を閉じてもらって、Bとして聞いてもらう。Aの告白のセリフをファシリテーターが語る」ということになった。語る内容や語り方については、当日ぎりぎりまで検討した。

授業後のリフレクションの方法については、50分の授業を体験して思ったことや感じたことを短い言葉で表現したのち、「自分なら道徳でどのように取り上げるか」をディスカッションすることにした。

またこの間、関連する書籍や新聞記事、ネットによる情報を交換したり、トランスジェンダーの方から話を聞けるワークショップに参加したりすることで、ファシリテーター自身の学習を進めた。

Ⅲ セミナーでの実際の展開

1 チェックインとウォームアップ

【13:30～13:53】

会議室の真ん中に空間をつくり、全員輪になって座るところからスタートした。

ファシリテーターの自己紹介ののち、講座の概要を説明。参加者と一緒に考えたい旨を伝えた。

参加者に、それぞれ自分の名前と所属を紹介してもらったのち、お互いを知ることかねて、いろいろな題でどちらのグループに属するかを表明する「あっち、こっち」¹²⁾のアクティビティを実施した。自分の立場を手を挙げて表明するのではなく、移動して同じ人同士でグループになった。

最初の題は「粒餡とこし餡、どちらが好き？」で「どちらでもない」の選択肢を設けた。「ドラ

マの手法を経験したことがあるかないか？（3人未経験）「今の社会生きていてお得なのは、男？女？（「どちらでもない」が一番多かった）」「年齢は20代、30代、40代、50代以上」。ここで年代が重ならないように参加者16名を4つのグループに分けた。参加者は小学校から大学までの教員および学生・院生だった。

2 道徳の授業

【13：53～14：38】

「道徳科で、セクシュアルマイノリティの問題をどう取り上げるか。その位置づけと方法を一緒に考えたい。これから中学校での道徳を念頭に置いて模擬授業をするが、自身が中学生になる必要はなく、自分自身としてこの授業の受講者になってほしい」と告げて、授業に入った。

(1) 告白するまえのAとBの関係

「AさんとBさんは中学2年生。クラスも塾も一緒。家族も仲が良く、今までに、家族ぐるみで一緒に遊んだりしていた」という設定で、各グループで、家族ぐるみで何をして遊んでいたか考えてもらった。そのうえで、それを静止画で表現。静止画とは、それぞれが登場人物やそこにあるものなどになってポーズをとり、立体的な1枚の写真をつくる技法である。条件として、①必ずAさんとBさんが居ること、②周りは、その家族であること、また③4人で表現しきれない他の家族がいると想定しても良い、と告げた。

数分の相談ののち、発表。グループは円をつくるように位置取り、テーマを述べて静止画をつくり、次のグループがテーマを言うタイミングで前のグループはポーズを解くという流れで4グループ連続して表現。シーンは「バーベキュー」「バーベキュー」「キャンプ」「スイカ割り」となった。

(2) Aの告白シーン

ファシリテーターのほうを向いて座っている参加者に、ファシリテーターは「Bさんになったつもりで、目を閉じて聞いてください」と告げた。「塾の帰り、AくんがハンバーガーショップでBさんと一緒にハンバーガーを食べています。その状

況を想像しながら聞いてください。私がAくんです」と述べ、用意したセリフを語った。

Aのセリフ

「あのさ、好きな人いる？
おれ、気になる人がいるんだよね。
いつも姿が見えないかなって、気にしてる。
見るとどきどきする。
熱くなるっていうか。
でもさあ、その人、男なんだよね。
おれって変かなあ。
いや、変だよ。忘れて、忘れて。
絶対誰にも言うなよ。絶対だよ。親にも言うなよ。」

この後、グループでAの言った内容を確認し、Bとしてどんな気持ちになったかを話し合った。「BさんはAくんに告白されるかと思ってどきどきしていたのにそれが違ってショックだったのと、Aくんが男の子を好きになったことのショックの2つがあるのではないか」「この想定があまり理解できない」などの声もあった。さらにはAがBに好きだと告白したと勘違いした人もいた中で、グループで話し合うことによって、状況確認が進んでいった。

(3) Bからの相談

続いての指示は次のようなものだった。

「Aくんの告白を重く受け止めたBさんは、ひとりで背負いきれず、誰か信頼できる人に相談したいと思う。グループで、相談する人(C)を決める。4人の内、1人はBさんに、1人は相談されるCさんになってロールプレイ。あとの2人は、Bさんと関係する誰かになるが、そこに居ないこととして2人の話を聞くことにする。Bは相談するときに、Aに影響が及ばないように、誰の話か分からないように相談すること。Aの名前を出さないこと」。下線部を述べたのは、アウトイング¹³⁾を考慮したからである。アウトイングとは、BがAの了解なくAについて知り得た秘密を他者に暴露することである。

ファシリテーターからの指示を受けて、3分間

のロールプレイが行われた。

(4) ロールプレイの感想

グループ内で、ロールプレイの感想を話し合った。

そののち、Cは誰か、どのような感想が出されたかを各グループから簡単に発表してもらった。

グループ1：Cさん＝Bさんの母

グループ2：Cさん＝Bさんの姉

グループ3：Cさん＝Bさんの姉

グループ4：Cさん＝中学校の先生

グループ2からは、「Bが誰のことだか分からないように相談していたところが、とてもリアルだった」ことや、相談を受けた姉役からは、「自分はLGBTについて理解があると思っていたが、身内がそうだったら気持ちが違うと気がついた。だから、妹が本当は自分のことを言っているのではないかと気になった」などの感想が出された。

(5) 話し合い「どう変わればよいのか」

グループ内で、LGBTの問題について個人として何ができるか、また社会や環境がどう変わればよいかを話し合ってもらった。

個人としては、周りにいる人たちが相談しやすい存在であること。家族や学校の先生、友達が相談を受け止める存在になれると良いのではないか。社会としては、NPO法人などセクシュアルマイノリティの関係者の団体や支援団体があること、社会の認知を広げていく必要性などが出されていた。

グループで話し合った内容は全体で共有せず、「ここでは時間の関係で実際にはやらないが、授業計画としては、感じたことや考えたことをリフレクションシートに書いて、今後の授業へつなげる」ことを告げて、道徳の授業は終了した。

3 リフレクション

【14：38～15：30】

(1) 授業で感じたこと

授業をふりかえって、一番感じたことを短いフレーズでA4版用紙に水性ペンで書いてもらった。授業方法ではなく、セクシュアルマイノリティに

ついて書くことと、周りと相談しないで自分の思いを書くことを強調した。書けた人から、休憩に入った。

短い休憩ののち、書いた言葉に説明を加えず、順に披露してもらった。回収できたものを表3に示す。分類は、著者らによる。

表3 セクシュアルマイノリティの授業で感じたこと

【自分自身への気づき】

- ・架空の人物か親しい人物かで答えは変わる。
- ・所詮はひとごと…をやめたいけど…
- ・「相談する」という段になって、誰に「相談するか」はとても難しいと思った。
- ・どのように受け止めるのが“良い”のか？

【他者への想像力・理解・共感】

- ・様々な立場の意見があること。／世界(外国)では、日本より一般的であること。
- ・理解へ向けての思いを引き出す 対話を生み出す。
- ・グループの皆さん及びその演じたキャラクターが「Aくんの思い」に共感的だったこと。少数派の悩みには共感者が大事！
- ・理解と共感
- ・色々な立場での視点
- ・想像力
- ・道徳的な正解はないが、imaginationが大事

【他の受講生への気づき】

- ・リアルなとまどい、沈もく
- ・セクシュアルマイノリティについて意外にみな寛容的な意見を持っているなという印象。

ここで資料を配布し若干の説明を行う。資料として、①学習指導要領における道徳科の「4つの視点と22の内容項目」とセクシュアルマイノリティとの関連、②「道徳授業で性的少数者について考える」授業計画と、2時間目にあたる今回のワークショッププラン、③コールバーグの道徳性発達理論より「道徳性の発達段階」¹⁴⁾、④思春期におけるゲイ・バイセクシュアル男性のライフイ

メント（表1と同じ内容）、⑤セクシュアリティの4つの要素¹⁵⁾、⑥NPO法人「ReBit」代表理事・薬師実芳さんの紹介記事¹⁶⁾を提供した。時間の関係で詳しい説明はせず、授業として取り上げる場合は的確な情報提供が必要であることを述べるにとどまった。

(2) セクシュアルマイノリティを道徳の授業でとりあげるか

そのうえで、「道徳科でセクシュアルマイノリティの問題をどう取り上げるか。その位置づけと方法」について話しを向けた。最初に参加者の一人が次のように発言した。

「中学生は、性的少数者の話だけでなく、その他の少数派についてどれだけ知っているのか？私は、自分はどんなマイノリティでも受け入れられると思っていた時期があった。でも、ある時、『あ！違う！』と実感することがあった。今回の内容を学校で取り挙げるなら、この学習以前に子どもが実感として自分の思いを出せる必要があると思う。これがないと、他人事になってしまう。」

この発言をうけてファシリテーターは、道徳で取り上げる前提で話し合うのではなく、「取り上げるかどうか」から考える必要があると感じ、「あっちこっち」の要領で、セクシュアルマイノリティについて自分が中学校の教員だったら道徳で取り上げてみたいかどうかを尋ねた。とりあげたい9人、とりあげたくない2人、その他5人という分布になった。発言順ではないが、主な意見を要約すると以下のようになる。

主な発言の要約（下線は著者による）

【とりあげたい】

- ①中学時代に、友人から同性愛であることを知らされた。その時に「自分も性的マイノリティなのか？」と考えてしまった。授業で、先生と生徒の関係ができていないなら、この内容を扱うことで差別をつくってしまう可能性もある。でも、私自身は性的マイノリティの人と多く関わってきたので、授業で何かしら可能性を見つけてやってみたい。
- ②学校教育で、身近にそういう人がいるからとい

う理由で身体障害者の話は教室では避けるという話を聞く。つまり、クラスの関係ができていないと取り上げてはいけないと思う。しかし、みんな何かしらの少数者にあるという感覚をもってもらう必要はある。ゴールの設定をしっかりとって実施したい。

【とりあげたくない】

- ③知識として必要だということは分かるが、リアルな話に持っていく良さが分からない。クラスの40人がリアルを自覚できるようにしようとしたら、自分はどう行動を起こして、どう対応したら良いかわからないから。一方で、建前のようにやれば、きれいに扱ってしまうことになる。知識が必要なのはわかるが…。
- ④ここで当事者になってみて、何か考えるところがあって…。自分の根底が見えてくるのが嫌だになっていうのがあった。私は、道徳で扱う自信がない。「クラスみんなが深く考える」のは疲れる。でも表面的な「みんながなかよし」で終わるのも違うなと思った。

【その他】

- ⑤道徳の授業でとりあげることではないと思う。性的マイノリティの話の前に、愛や性を学校で学べていないのがおかしい。その前提があって、今回の性的マイノリティの話があるはずである。愛の話をしなくて、性的マイノリティの話をするのはおかしい。
- ⑥大阪は、差別、特に部落差別について人権教育の中でよく教育現場では取り扱われる。そこに当事者がいるのは当然のこととして、教師は当事者からも学んで知識を得た上で子どもたちが理解していくという方向をしている。道徳で扱う意味はある。それぞれの時代が必要とされることは、少しずつでもやっていく必要がある。まず当事者がどういう気持ちでいるかわかり合っていないといけない。大切なのは対話だと思う。また、子どもたちに今苦しんでいるところだけ見せるのではなく、良い方向になっている面も意識して見せてやっていけるといい。

- ⑦これからは、道徳も評価が必要になってくる。取り扱うべき事だけど、評価の対象となってしまうのはおかしい。
- ⑧答えがないものを評価してはいけない。マイノリティに対して差別してはいけないことは、子どもも分かっている。でも、この授業で「私、差別しちゃうかも」と言えることは大切。
- ⑨道徳の授業では、やりたくない。でもこのことは、子どもたちに伝えたいと思う。

予定の時間になったので、全員に発言してもらうことができなかった。最後にファシリテーター自身が試行錯誤しながら取り組んできたことを伝え、「完成されたプログラムを提供できたわけではないので、それぞれが『もやもや』を持って帰っていただいて、今後考えていくきっかけにしたい」という言葉で締め括った。

終了後も去りがたく、あちこちで参加者同士の話が続いた。

Ⅳ ふりかえり

1 プログラム作成過程において

今回、同じ研究会に所属し、演劇的手法について共通理解のある著者らが担当したことで、プログラム作成過程においても演劇的な手法のシミュレーションを取り入れながらプランの検討が行われたことは特徴的である。プログラムの中のロールプレイの状況設定の大きな変更は2回あり、1回目の7月1日のシミュレーションでは、著者らは、自分事として学習者が捉え考えることができるためにはどうしたら良いか、そのシーンの雰囲気を出すことができるのか、などの課題に気づくことができた。2回目の研究会例会においては、著者らが演じてみたことによって、その演技自体が登場人物AやBの性格を表現してしまうことを他の人の助言により知ることができた。ファシリテーターの価値観に影響されずに参加者が問題をとらえる方法を思考錯誤することに繋がった。

また、若手の小学校教諭と教員養成に携わる大学教員という同僚でもなく同じ世代でもない著者らが、「性的少数者の授業」という新しい取り組みのもと、「取り上げなければ」という思いと、「可

能なのか」という自信のなさの葛藤の中で、共に悩んだということは貴重な体験であった。著者らが自分自身のセクシュアリティに向き合い、迷いつつも、プログラムをつくることができたのは、演劇的手法で参加者の自分事を引き出すために、著者ら自身のリアルを考えざるを得なかったことが影響している。そのことが、立場の違いを乗り越えた率直な話し合いに繋がり、3ヶ月間のたくさんのメールのやり取りを生み、それぞれの考えや思いを本音の部分で話合うことに繋がった。それはまた、「参加者に対して完成したものを提供する」という背伸びしたものではなく、「参加者と一緒に考える」という姿勢を生み出した。

二人で課題を乗り越える過程は、経験の永い教員にとっても新しい境地を啓くものであり、若手教員にとってもだけでなく、著者ら双方にとっての教員研修になっていたといえる。

2 ワークショップにおいて

こうして作成したプログラムは、演劇的な手法を用いることによって、表3に見られる「所詮はひとごと…をやめたいけど…」『相談する』という段になって、誰に『相談するか』はとても難しいと思った」といった参加者の実感に繋げること成功したのではないだろうか。

参加者の発言をふりかえると、主な発言の要約①②で述べられたように、授業でとりあげようとする場合でも、「先生と生徒との関係」や「クラスの関係」抜きにこの問題を取り上げることはできないだろう。

「とりあげたくない」という③④からは、いずれも「リアルな話に持っていく良さが分からない」「当事者になってみて、何か考えるところがあった」のことは、ロールプレイという演劇的な手法によって、自分事として考える体験を得たことが窺える。「自分はどう行動を起こして、どう対応したら良いかわからない」「『クラスみんなが深く考える』のは疲れる」という率直な思いや辛さが述べられた。

人権の問題や道徳は単なる知識の取得ではなく、心のありように関わる。道徳科として心に触れる難しさがこの発言に見られる。

また、⑤⑥においては、道徳科という教科の枠ではなく、学校教育全般に関わって性や人権を位置付けていく問題意識が表れている。

一方、道徳が教科化される中で評価を求められるようになり、⑦⑧⑨のように、こういった教育が、評価を伴う教科としての道徳となじまないという考えも表明された。

いずれも率直な思いが語られ、それぞれの立場から、セクシュアルマイノリティの授業を考えるうえでの大切な指摘であったと考える。何かすっきりとした結論があったわけではないが、考え続ける材料をお互いに提供しあうことができたのではないだろうか。

また、状況設定については十分吟味したつもりだったが、BがAに恋愛感情を持っていると考え、ロールプレイがBの恋愛相談になったグループがあった。これは、Aの最初のセリフを「好きな人いる？」としてしまったことで、誤解を招いたと考えられる。「Bの悩み」に焦点が当たることで、関心がCの相談者としてのスキルというところへ行きかねない。次項でも触れるが、さらに状況設定の見直しが必要である。

V 今後の展開に向けて

参加者の率直な発言により、著者らにとって学ぶことの多い実践となったが、今後に向けての課題を述べて、このノートの締めくくりとしたい。

それは、支援団体との連携である。

著者らは、プラン作成の過程でこの取り組みについてセクシュアルマイノリティを自認する人と直接話し合うことはなかった。こののち、LGBTなどの多様な性を生きる人を支援する団体QWRC¹⁷⁾と連絡をとり、スタッフのいのもとさんにセミナーのプログラムを検討していただくことができた。

まず、Aくん、Bさんという表示について、Aさん（男）、Bさん（女）という表示のほうが良いと指摘を受けた。著者らも、「くん」といえば男、「さん」といえば女ということに疑いを持っていなかったことに気がついた。

もうひとつは、BがCに相談するという設定がアウトティングにならないかという点である。著

者らは、Aが誰か特定されなければアウトティングにならないと考えていた。しかし、相談されたCはAが誰か知りたくなる。Cから聞かれればBがAの名前を出してしまうことも考えられる。また、そもそもAからすれば、名前は出されなくても、自分のことを了解もなく他者に話されたことに変わりはないだろう。Aの秘密を暴露する気持ちのないBの行為をアウトティングと言えるかどうかは微妙であるが、アウトティングに容易につながるものが想像される。したがって、この状況設定を取り上げることはアウトティングについて相当の理解が進んでからということになり、中学校の道徳の授業として取り上げる場合には、設定を変更する必要があるだろう。

書物やネット上の情報でかなり学んだつもりになっても、それだけでは限界がある。参加者の発言で「当事者からも学ぶ」ということばで指摘されたように、LGBTを自認している方や支援団体から学ぶことは多く、今後支援団体と連携し学びを深めたいと考えている。

今回は道徳としてLGBTについて考えたが、理科、保健、社会など様々な角度から「生と性」の問題として取り組むことができる¹⁸⁾。参加者が語った「みんな何かしらの少数者にあるという感覚」ということばから、LGBTについて学ぶということが、単にLGBTについて知ることではなく、「このテーマの本質は人のあり方や生き方の問題であり、他者理解につながる問題」¹⁹⁾であることに気づかされる。セクシュアルマイノリティについて学ぶということは、そのことを通して、多様な人と共に生きていく力をつけるということだろう。著者らもその学びの過程にいる。

【注および引用文献】

- 1) 厚生労働省エイズ対策研究推進事業『ゲイ・バイセクシュアル男性の健康レポート』ゲイ・バイセクシュアル男性のHIV感染予防行動と心理・社会的要因に関する研究「研究報告書」概要版 本文1ページ 日高庸晴 <http://www.j-msm.com/report/report01/report01/>（最終閲覧日 2018年8月2日）
- 2) 同上 本文3ページよりグラフを表に転換
- 3) 同上 本文2ページのグラフより

- 4) 厚生労働省エイズ対策研究推進事業『ゲイ・バイセクシュアル男性の健康レポート2』
<http://www.j-msm.com/report/report02/>（最終閲覧日2018年8月2日）
- 5) 『先生と親のためのLGBTガイド もしあなたがカムアウトされたなら』遠藤まめた 合同出版 2016年
- 6) 『LGBTなんでも聞いてみよう 中・高生が知りたいホントのところ』QWRC & 徳永桂子 子どもの未来社 2016年
- 7) dentsu News Release 「電通ダイバーシティ・ラボが『LGBT調査2015』を実施」によると、全国約7万人を対象に調査し、LGBT層に該当する人は7.6%だった。
<http://www.dentsu.co.jp/news/release/pdf-cms/2015041-0423%2B.pdf>（最終閲覧日2018年11月7日）
- 8) 日本大学教育学部文理学部教育学科渡部淳教授代表
<http://www.kakutokuken.jp/>（最終閲覧日2018年11月7日）
- 9) 演劇教育では、観客とのコミュニケーションを主とした観客に見せることを目的としたTheaterと観客を意識しないDramaを区別することがあり、演劇の手法が学習方法として用いられるときはドラマという言葉が用いられることが多い。
- 10) 【LGBTドラマ】day by dayは本編4までYouTubeにアップされている。
<https://www.youtube.com/watch?v=stpLtStw9IU>（最終閲覧日2018年11月7日）
- 11) 募集要項では、タイトルは同じだが、本文は制限字数の関係で次のようになった。「授業でどう取り上げたらよいかと悩んでいる教員もいらっしゃるでしょう。ドラマの手法を使って『性的少数者についての授業』にチャレンジしてみます。一緒にチャレンジして下さる方の参加をお待ちしています。」
- 12) 『参加型アクティビティ入門』渡部淳+獲得型教育研究会 学事出版 2018年 12ページ
- 13) AがBに自分のことを告白するカムアウトに対して、BがAの了解なくAについて知り得た秘密を他者に暴露することはアウトイングと言われる。誰かに相談したい場合、守秘義務を守ってくれる第三者機関に相談できることは知っておく必要があるだろう。
- 14) 『ゼロから学べる道徳科授業づくり』荒木寿友 明治図書 2017年 123ページ
- 15) セクシュアリティの4つの要素とは、「心の性」「身体の性」「社会の性」「好きになる性」である。この組み合わせによって、多様な性自認が生まれる。
『LGBTなんでも聞いてみよう 中・高生が知りたいホントのところ』QWRC & 徳永桂子 子どもの未来社 2016年 24-25ページ
- 16) 朝日新聞「フロントランナー：NPO法人「ReBit」代表理事・薬師実芳さん 多様な性、ともに考える」be on Saturday 2017年6月17日号 1面、3面
- 17) QWRC（くおーく）は、2003年4月にオープンしたLGBTなどの多様な性を生きる人やその周辺にいる人と女性のためのリソースセンター。大阪に拠点を置く。
<https://qwrc.jimdo.com/>（最終閲覧日2018年11月7日）
- 18) 東京都の私立桐朋小学校星野俊樹先生の実践より。星野先生は、LGBTを含む「生と性」の授業を、理科、社会、保健の教科などを通して多面的に取り組んだ。
BuzzFeed「あの日の僕や君を救いたかった。『生と性』を小学生に教えた担任の2年間 それは『自分の人生の主導権を他人に渡すな』ということ」2018年5月4日付 Rumi Yamazaki 山崎瑠美 BuzzFeed Managing Editor, Japan
https://www.buzzfeed.com/jp/rumiyamazaki/life-and-sex-class?utm_term=.yrXjV4nDz#.vbPjx6O2l（最終閲覧日2018年11月7日）
- 19) 同上より引用